

第二回講義への学生のコメント

今回の授業では、正しさの捉え方について学んだ。「正しさは人それぞれ」で片づけ
てはならず、英語でも“true”と“right”のように異なるのである。そこで、「正しい」
という言葉、辞書で引いてみた。まず、広辞苑では「まがっていない」、「よいとする決
まりにあっている」など2種類の意味が出てきた。次に、明鏡国語辞典では、「きちんと整
っている」、「道徳や法律にかなっている」、「真理に合致している」、「正統である」など4種
類の意味があった。この2つの辞書に共通するのは、社会規範に基づく「正当」であった。
それ故、皆が「正しい」と決めたことに対し、従うことが「正しい」のである。

一概一口に「正しさ」といっても、真理としての正しさや正当・公正としての正しさ
などがある。真理としての正しさとは自然科学における正しさであり、言葉と物の一致を
指す。対して、正当・公正としての正しさとは権利やルールであり、倫理学における正し
さを指す。ここでいう正しさは個人的な道徳感情や価値観ではなく、社会的な規範をもと
にしたものであり、国が違っても普遍である。

今回の授業では、前回の授業コメントに対する指摘と正しさ、価値観などについて学ん
だ。価値観や正しさなどは普遍的なものであり、人によって大きく変わることはないとい
うことがわかった。そのため、価値観や正しさは人や国によって異なるものであるととら
える必要はない。なぜなら正しさは社会的な規範によって決定され、それらを人々が内面
化するからである。よって、国などによっても好ましくないことなどはほぼ同じで価値観
や正しさは基本的に普遍的なものである。

「自然界の現象を研究する学問の総称。実験・観察・数理に支えられて、対象の記述・
説明、さらには事実間の一般法則を見いだし実証しようとする経験科学。」(デジタル大辞泉
/小学館「自然科学の意味」<https://dictionary.goo.ne.jp/jn/97047/meaning/m0u/>より)。

19世紀以降、元々は自然科学という意味だった哲学は、各地で大学が設立されそれぞ
れの学部・学科でそれぞれの専門分野が教えられ「分化した学問」へと変質していったため、

コメント [y1]: 日本語の文章で“”は使
いません。「」を使いましょう。

コメント [y2]: なぜ辞書で引いたのです
か? 授業での説明が納得できなかったとい
うことでしょうか?

コメント [y3]: 以下の結論は飛躍していま
す。「複数の辞書で共通に取りあげられてい
る意味」だけが正しい意味とは限りません。
また、「皆が決めたこと」が間違っている場
合もあります。その場合は批判する方が正
しいrightふるまいでしょう。

自然科学という言葉で表されるようになった。

哲学における正しさには覆ることのない心理としての正しさや、倫理学に基づいた道徳的なルールのような正当・公正としての正しさがある。個人的な道徳感情はや価値観と社会的な規範とは異なる。

今回の授業で、「平等」という一言だけでも、結果の平等や、機能の平等、可能性の平等など哲学的に捉えると、様々な少なくとも三種類の平等があることを学んだ。また「正しさ」も様々では二つの意味があり、真理の意味である True は、自然科学における正しさ、つまり言葉と物の一致を示す。正当、公正の意味である Right は、倫理学における正しさを示すということ学んだ。だが、社会が共通して正しいと思うことには必ず根拠があり、共通された価値観として認識されている。だから、価値観が社会の人々それぞれ違えば社会が成立しないと学んだ。

「平等とは配分の公平さ」と授業の中で先生はおっしゃった。そこで公平な分配について調べた。「分配原理には、公平原理、平等原理、必要原理の代表的な3種類がある。公平原理とはそれぞれの成果や貢献の度合いによって報酬を分配する原理である。平等原理とは、結果を問わずそれぞれの人に均等に報酬を分配する原理。必要原理とは、それぞれの人のニーズに応じて報酬を分配する原理である。」(Encyclopedia 心理学事典より)。報酬に関しては、社会の中では公平原理が使われるべきだ。そう考える理由は、一生懸命働く人間と働かない人間が平等に同額の報酬をもらうことは、公平であると言えないと考えるからだ。公平とは皆が納得できる結果を出すことであるからだ。

今回の授業では、哲学が持つ神の概念や、人生観、正しさについて学習した。初めに、神については人によって考え方が違う。アリストテレスが考える神とはすべての物事の第一原因であるという。またキリスト教の考える神はすべての物を創りだした創造神であり、全知全能の持ち主である。「神のみぞ知る」という言葉はここに由来するものなのだろうか。そしてこの神が世界を創造した意図に迫りたいという動機で近代科学が成立した。これらの神についてだが、西洋では神がすべての中心であり、神が人間を含めこの世のもの全てを生み出したと考えられている。しかし日本では、「八百万」という言葉があるようにこの世にあるもの全てに神が宿っているという考え方がある。西洋と日本とで神についての考え方が違うように、同じものを取り上げていても、そこにはその地域特有の文化などが反映されるのかもしれない。西洋哲学以外にも日本哲学など他の地域の哲学について考えるのも面白い。

コメント [y4]: ウェブサイトですか？制作者は誰ですか？

コメント [y5]: 「～と考える。なぜなら、～と考えるからだ」では、あなたの考えから外に出ていません。客観的な根拠や理由を調べて書きましょう。

コメント [y6]: そうは言っていません。アリストテレスの考えとキリスト教の考えという二つの代表的な考えについて説明しました。西洋思想では基本的にこれら二つの考え方にもとづいて神を考えますから、「人によって違う」ということではありません。

コメント [y7]: 質問の言いっぱなしはやめましょう。また、なぜそのような疑問を提起するのか、理由を説明しましょう

コメント [y8]: あなたはどのような考えを信じていますか？大多数の日本人が本気でそう信じていると思いますか？

私たちが何気なく使う言葉も実は様々な面を持ち、具体的に述べる必要がある。また、質問をする時、授業との関連性やどのように答えて欲しいかなども明記する必要がある。そして、私たちは哲学を考える上で正しさはやはり人それぞれなのではないかと考えてしまうのは、戦前の価値観の押し付けによって大きな過ちを犯したことの反省からきている。しかし、正しさは経験に先立つ普遍的なものでまた、価値観も同様である。

自然学から生まれたを含むものであった哲学は自然の理論を色々含んでいます。でも近代になると、哲学はもっと深い学問となつて、自然だけではなくもっとコンプレックスな学問となりました。形而上学は哲学の一部ですあり、哲学から独立しています。形而上学は哲学のある考え方です。自分に対してとって、基礎的な哲学を勉強して、哲学な考え方を身につけて、他の学問を勉強する時も哲学な考え方で考えるのが一番大切なことかもしれません。

1 正しさと言っても様々あり真理と正当では大きく違い正当の方は感情に流されやすい。また個人的な道徳感情や価値観と社会の規範とは異なる。道徳的な正しさとは社会的な規範で個人的なものではない。

2 花時間や期間は価値観や規範は社会や時代によって異なる。

3 人は過去を前提に今があり過去を元に規範や価値観も変わっていいものは残し、悪いものは改善していくから。

今日の講義の内容は、前回の講義の授業コメントから選ばれた疑問に対する返答とコメントの書き方の解説、新たな概念の説明だった。コメントに対しては単語の意味を定義し、質問はその意図が分からなければいけない。

新たな概念として、哲学における神が登場した。中世哲学はアリストテレスの学問とキリスト教を整合するさせるために行われた。星の運行など、運動の原因になるものが証明されないにも関わらず運動が発生永遠に継続している理由を、神という第一原因を仮定することで、アリストテレスは神の理論を完成させた。これの対し、キリスト教の神は創造者であり、全知全能・無限の存在として在った考えられた。この二者の間を埋め、神の

コメント [y9]: 具体的にどんな理論を含んでいるのか書きましょう。

コメント [y10]: どういう意味ですか？具体的にどのようなことを研究するようになったのですか？（古代と近世では「哲学」の研究対象はそれほど変わっていない、と授業で説明しましたが。）

コメント [y11]: 具体的にどのような考え方でしょうか？

コメント [y12]: なぜ大切なのか、理由を説明してください。

コメント [y13]: ちゃんと○を付けましょう。

コメント [y14]: 授業では「それほど異ならない」と言いました。そうでない、と主張するのであれば、まずは授業の内容をまとめ、どうしてそうでないのか、どの部分がおかしいのか、きちんと説明してください。

コメント [y15]: 具体的には、アリストテレスの世界（宇宙）は永遠、キリスト教の世界は始まりと終わりがある点が、両理論の間の矛盾とされた。

働きの意味に迫るため、近代科学は始まった。

次に、正しさについての解説があった。正しさには大きく二種類あり、真理である True と正当・公正とも言える Right である。True は自然科学における「正しさ」であり、古典的には言葉と事物の一致を意味する。Right は倫理的な「正しさ」であり、社会的な規範である。Right は個人的な道徳感情と混同されやすいが、社会において共有された価値観であり、異なるものである。「好み」は異なっても構わなが、「価値観」が各々の人の中で違いくると社会が成り立たない。どの国、時代においても、「人を殺さない」などの原則は同じである。価値観も自然科学と同様に普遍であろうとする。しかし、ナチスなど、社会全体が価値観を過つ場合もある。

キリスト教にせよ仏教にせよ、いずれの宗教にも倫理的な規範というものはある。それは法律などと同じく、「人を殺してはならない」などの普遍的なものである。しかし、規範の中には血に触れてはならない、右手は清潔で左手は不浄などの普遍性に疑問のあるものもある。歴史の中で人は、自分たちの信仰の中の規範にそぐわないものを異端などとし、排除してきた。根底にある倫理的な意味は同じでも、僅かな差異が原因で争ってしまう。信仰はこれまで多くの人の精神的支柱となってきた。しかし、同時に争いの理由にも使われてきた。倫理を哲学の一部とするならば、信仰も取り扱わなければいけない。その際、どの箇所が普遍的で、そうではないのはどこかを把握したうえで議論、問題提起しなければならない。

今回の授業では、主に前回の授業コメントで出た意見や質問に関することを学んだ。哲学における神、正しさのとらえ方や価値観について学んだ。

私は前回、正しさは人それぞれ違うのではないかという意見を述べたが、今回の授業で正しさにもさまざまな正しさがあり、True(真理)と Right(正当・公正)の違いも理解できた。True(真理)は言葉と物の一致で、変えようと思っても変えられないものであり、実際に起こった事実などもこちら側に含まれる。Right(正当・公正)は倫理的な正しさであり、殺人をしてはいけないなど、人の権利などを考えたうえでの正しさである。ただ、相手の気持ちを考えた思いやりなどはこれには含まれない。

正しさは人それぞれではなく、普遍的である。そして、正しさには様々なものが大きく分けて二つある。~~ほ突は~~自然科学における正しさ=真理。倫理学における正しさ=正当、公正である。また、道徳的な正しさは社会的規範であり、社会において共有された価値観であり、価値観は好き嫌いの問題ではない。好みは人それぞれで良くても、価値観が人それ

コメント [y16]: 「清浄と不浄」「神聖なもの」と卑俗なもの」といった二分法はかなり普遍的なものです。何がそれに割り振られるかという点は異なりますが。

コメント [y17]: 大部分の「宗教戦争」は、教派の権力や利権を守ることがそもそもの目的でした。闘争に際して、教義が連帯のきずなどとして利用され、宣伝されたために、それを信じ込んだ人たちが、教義の違いを闘争の真の理由だと信じ込むようになった、というのが歴史的な実態でしょう。

コメント [y18]: なぜ含まれないのですか？授業ではそのようには述べていませんが。

それなら社会が成り立たない。そして、価値も普遍が志向されるのである。

正しさは、人それぞれ全く違うということではない。正しさには真理という意味の **True** と、正当・公正という意味の **Right** がある。**True** は、自然科学における「正しさ」つまり、言葉と物の一致を表す。**Right** は、倫理学における「正しさ」を表す。信号の赤のように道徳的には赤でも青でもよいが規約によって決められているルールもある。社会的な規範の中で私たちは生きているため、個人の道徳感情や価値観で正しいか、誤りかを判断してはいけない。それが許されてしまったら社会が成り立たない。よって、私たちの社会で共有された価値観があるから成り立っている。正しさは、多くの個人は社会的な規範を内面化するため、人それぞれ全く違うということではない。

今回の授業は、前回の授業コメントに関する先生の応答が主な内容だった。

その中で、私が興味を持ったのは二つのことである。一つ目は、「なぜ〜**七井**なのか」という問いには様々な答え方があるということだ。アリストテレスは、「四原因説」で、その答え方は、目的・動力・材料・形相(本質)の四つに分けられるという。例えば、「なぜこの家は立っているのか」という問いに対する回答は、目的の観点からいうと、「人間が住むため」であり、動力の観点からいうと、「大工さんが建てたから」であり、材料の観点からいうと、「この家を建てるのに使っている木材や鉄筋などが丈夫だから」であり、形状(本質)の観点からいうと、「これが『家』であるから(屋根・壁・ドア・窓の要素から、これが家であると認識できるから)」である。よって、この授業コメントで先生に「なぜ〜なのか」と質問したいときは、自分が四つのうちのどの回答がほしいのか、わかりやすく示さなければならぬ。それだけでなく、日常会話の中で、自分が相手からの「なぜ〜なのか」という問いに食い違った返答をしてしまったり、相手が自分の問いに食い違った返答をしてしまうことがあるが、このようなことも未然に防ぐことができる。

二つ目は、「正しさは人それぞれではない」ということに対する学生の疑問の中で、「やはり、価値観は人それぞれでは?」というものがあつたが、この「正しさ」は二つに分かれるということである。一つは「**Ture**:真理」で、自然科学による「正しさ」であり、言葉と物が一致するということである。もう一つは「**Right**:正当・公正」で、倫理学による「正しさ」であり、個人的な「道徳・感情」と混同されやすい。「正しさは人それぞれ」の「正しさ」は「**Right**:正当・公正」であり、「正しさは普遍的」の「正しさ」は「**Ture**:真理」の方なのである。「国によって法律が異なることから、正しさは人それぞれなのでは?」というのは、「価値観や規範は社会や時代によって異なる」というわけでもなく、国が違っても禁止

コメント [y19]: なぜ興味を持ったのか、理由を説明してください。

コメント [y20]: Right も普遍的。

されていることは大体同じである。

ここで考えられるのは「死刑制度の有無」についてだ。日本は今でも死刑制度が残っているが、外国ではもはや死刑制度を廃止しており、日本のような国はマイナーとなった。国内でも、死刑制度には賛否両論ある。賛成派は、「殺人をした者は自分の命をもって償うべきだ」「もし自分の家族が殺されたとしたら、犯人には死んでほしいと思うから」という昔からの「仇討ち精神」が根強く残っている。また、「犯人を終身刑にしても、税金が無駄になるだけだ」という社会的背景を指摘する声もある。逆に反対派は、「犯人が人を殺したからと言って、国が人を殺してよいのか」「法律は加害者のためのものでもある。更生させたほうが死ぬよりも罪を償うことになる」という意見である。ここでの論争はすべて「Right: 正当・公正」による「正しさ」追求である。「True: 真理」による「正しさ」は、死刑を廃止している国々も含め、誰も知らないところにある。

自然科学において神は存在しない。西洋思想における三本柱は「プラトン・アリストテレス・キリスト教」である。中世哲学は、キリスト教とアリストテレスの諸学問を整合させるために行われ、近代哲学は神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。

1970年代ごろから哲学について「人生観・価値観」などの意味が広がった。また、もともと自然科学という意味であった哲学ははという言葉に代えて、19世紀以降に自然科学という言葉が広がりはじめた。その理由は、19世紀になって近代的な大学が設立され、学部・学科においてそれぞれの専門分野が教えられるようになったため、学問も「分科した学問」へと変質したからである。

また、「正しさ」の種類はさまざまあり、True すなわち真理とは自然科学における「正しさ」、すなわち言葉と物の一致である。Right すなわち正当・公正とは倫理学における「正しさ」で、個人的な「道徳感情」と混同されやすく、規約によって決められたルールもある。また、価値観は多くの個人の社会的な規範を内面化するため、社会を成り立たせるのに必要である。さらに、価値観や規範は社会や時代によって異なるというわけではなく、普遍が志向されている。

私は「正しさ」にはさまざまな種類があると受け、他にはどういった意味での「正しさ」があるのか、と疑問を抱いたので、他の単語をジーニアス和英辞典で調べた。その結果、「Accuracy」という単語が出てきた。そして、さらにその単語の意味をジーニアス英和大辞典で調べると、物理・化学における「正しさ」で、正確さや精度といった意味であった。同じ日本語の「正しさ」でもさまざまな全く異なる意味を持つものがあることが分かった。自分の考える単語の意味にとらわれず、しっかりと調べて単語を利用する。

コメント [y21]: 自然科学は Truth を求めます。「真理は誰も知らない」ということはありません。

コメント [y22]: これは学生のコメント。自然科学はキリスト教における神の創造説を前提として成立した。

コメント [y23]: 二種類ある、と言いました。

今回の授業では、哲学における神、正しさなどについて学んだ。まず本質が実在すると考えるプラトン、経験主義のアリストテレス、そしてキリスト教が西洋思想の三本柱である。アリストテレスの考える神とは第一原因、不動の動者である。何かを運動させるためには、それを動かすものがそれ自身で動いて動作を加えなければならない。しかし、さかのぼっていくと、最初は自らは動かさず、他のものを動かすものがいたことになる。それが神だ、というのがアリストテレスの神だ。キリスト教の神は、創造神で全知全能なもの。アリストテレスと違うところはキリスト教の神は世界をクリエイトしたところだ。次に、正しさとはさまざまであり、例えば True 真理や Right 正当、公正がある。True とは自然科学における「正しさ」であり、言葉と物の一致のことである。Right とは、倫理学における「正しさ」であり、規約によって決められたルールもこれにあたる。好みは人それぞれであるが、社会的な規範を内面化する価値観はそれほど人によって変わらない。以上が今回の授業の要点だ。

価値観を作っていく過程である、社会的な規範を内面化するやり方を国際的に統一すべきだ。確かに、やり方を統一し、価値観が個人個人、国家国家でそれほど違いを持たなくなれば、多様性というものも失われるかもしれない。しかし、価値観を統一していくことで犯罪が減ったり、グローバル化がますます進み、世界が豊かになる。今、世界ではテロなど凶悪な犯罪が多くあるが、それはそうすることが正しいと思い、やっている人達がいる。そのような人を減らすためにも価値観の統一化をはかる必要がある。

正しさや価値観は人それぞれと思われがちだが、道徳的正しさとは、社会において共有される価値観のことである。多くの個人は社会的な規範を内面化するので個人の価値観も全く違うということではない。例として、殺人や盗みは、ある国では推奨され、ある国では処罰されるということは無いからだ。やはりどの国に行っても内面化された価値観は国が違っても似ている。「好み」は人それぞれだが、価値観は似ていないと社会が成り立たない。

哲学を辞書で引いてみると「経験から作り上げた人生観」とあるが、人生において経験することは皆違う。そうになると、哲学といっても全く違う学問になるのではないか。これに対する私の考えは、人間が正しいと思うこと、価値観は変わらないので、似た学問に仕上がるといえるものである。

今回の授業の要点は、正しさについてである。

コメント [y24]: 自然な成長の過程として起こるので、現状でも必ずしも統制されていません。最近、「道徳の教科化」として、政府が子どもたちに何とか特定の規範や価値観をすり込もうとしているようですが。

コメント [y25]: そういう人たちはもう大人だから、今から価値観をすり込もうとしても難しいでしょう。考え方が違う人たちに対して、自分たちの価値観を強制的にすり込もうとするよりは、対話して相互理解を図る方がよいでしょう。

コメント [y26]: こうした用法は 1970 年代に普及した、という話を前回しました。

自分の中ではこれは大丈夫ということでも他人からすると大丈夫ではないということとはよくあることで、その人にとっての物事のよし悪しは人それぞれの価値観によって決定される。

しかし、価値観が違うからといって会社などで上司に反抗してしまうと干されてしまうこともある。けれど、反抗したほうの主張のほうが正しいこともあるかもしれない。前回の授業で「正しさは普遍的なものである」と学んだ。何が正しくて、正しくないのかは普遍的なことを導くしか方法がないのかもしれない。

コメント [y27]: 具体的にどうやって導くのでしょうか？

授業の内容は学生のコメントを使い論理的文章の書き方の説明と正しさにおけるの true と right の違い。

猫そっくりの犬を誰かが猫だと思ってもその存在は犬にはならないというお話について 1 つ意見がある。先生は品種改良をして猫そっくりの犬を作った場合とおっしゃっていた。しかし、「猫だと思われてもその犬は猫にならない」という例として不適切だ。なぜならこの場合品種改良という話が入ると犬か猫かというのは動物の専門家でもないとわからないからだ。

コメント [y28]: そんなこと言ったっけ？よく覚えていませんが、あまり本質的なことではありません。

コメント [y29]: 「それが犬だと分かる」と、「それが犬である」ことは別です。

キリスト教とプラトン哲学を整合したアウグスティヌスは「最初から敬虔なキリスト教信者だったのではなく、むしろ神さえも疑いにかかる『ギリシア哲学・古代哲学』を学ぶ哲学者の立場だった」。——(ピコ の平成徒然草 <http://pikonotisikidana.hatenablog.com/entry/2017/11/02/133054>)。

コメント [y30]: 制作者は誰ですか？

しかしながらキリスト教の土台を作り後世に名を残すまで有名になったのだろうか。

キリスト教以外にもイスラム教などの宗教はもうすでに誕生していたのになぜキリスト教とプラトン哲学を融合させたのだろうか。

コメント [y31]: アウグスティヌスは 354 ~430 年、ムハンマドは 570 頃~632 年。

もしイスラム教と融合していたならば、イスラムは西ヨーロッパでも多く布教できていたに違いないと私は予想する。

コメント [y32]: 単に予想するだけでなく、そう予想する根拠を示し、予想が真実かどうか検証するために調べてください。

やはりその当時からキリスト教の勢力は大きかったのだろうか。

一言で「正しさ」と言っても様々で、大きく分けて 2 つの「正しさ」がる。まず 1 つは「True:真理」で、自然科学における「正しさ」である。自分が〇〇だと思っても本当は△△で、思った時点で△△という物は〇〇には変化しない。このように、真理というものは

言葉と物の一致ということである。もう1つの「正しさ」は「Right:正当・公正」で、倫理学における「正しさ」を指す。個人的な道德感情と混同されやすいので注意する。

個人的な道德感情や価値観と社会的な規範は異なる。道德的な正しさは社会的な規範であり、多くの個人の社会的な規範を内面化するので、個人の価値観もそれほど違わない。価値観や社会的な規範は国ごとに大きく異なることはなく、おおむね同じである。文化的な背景があって禁止されていることや、自国で禁止されていても他国では禁止されていないことも多々あるが、どの国でも「好ましくない」と思われていることは大抵同じである。価値も普遍が志向させるが、社会全体が過つ場合もある。

今回の授業で、自然科学における「正しさ」が「真理」であり、倫理学における「正しさ」が「正当」であるということと、「好み」はよくても「価値観」がひとそれぞれであっては社会が成立しないということをきいて、冷戦時の資本主義と社会主義の対立のように、価値観のちがいは、国どうしの争いにもつながり得るのだと思いました。

コメント [y33]: 資本主義と社会主義の対立は、単なる価値観の対立ではありません。社会主義は資本家階級を否定し、資本主義諸国における資本家の地位を脅かしたために、対立が起こったのです。

プラトン、アリストテレス、キリスト教は西洋思想の三本柱であり、中世哲学はキリスト教とアリストテレスの諸学問を整合するために行われた。そして、近代科学は神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。

正しさといっても true 「真理」は自然科学における正しさであるのに対し、right 「正当、公正」は倫理学における正しさである。

前回の授業で、「価値観や規範は社会や時代によって異なるのではないか」という質問があったようだが、国が違って禁止されることはおおむね同じであり、価値も普遍が志向されるので、そのようなことはない。

哲学用語の「認識」は英語で knowledge 「正しい知識 truth」ということであるのに対し、日本語の「認識」は knowledge と belief の両方の意味で使い、哲学で両者は反対概念である。

なぜ、哲学用語と日本語の哲学の意味は異なるのだろうか。それは、日本は古代から仏教や神道による belief 「信念」という概念があり、哲学が古代から発達してきたヨーロッパとは異なる時代背景があったからであるからではないだろうか。"

自然科学的に見て、神は存在しない。 中世哲学はキリスト教とアリストテレスの諸学問

コメント [y34]: コメント y22 を参照。

を整合させるために、近代科学は神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。

19世紀に大学が改革され、それに伴って「大学教員=科学者」が成立した。学問も「分科した学問」へと変質した。そして、自然科学という学問の呼び方になった、

「正しさ」は様々で、自然科学における「正しさ」は True(真理)で、言葉と物が一致することである。また倫理学における「正しさ」は Right(正当・公正)で、規約によって決められたルールに則る。

多くの個人は社会的規範を内面化するので、価値観はそれほど変わらない。

価値観は人それぞれというのが常識だと思っていたが、そもそもの価値観の基盤に社会的規範があるので価値観に幅はさほどないという理論に納得した。

今回の講義で、哲学という言葉の意味と、正しさは普遍的であるという考え方について学んだ。特に印象に残ったのは、「『好み』は人それぞれで構わないが『価値観が人それぞれ』なら社会が成り立たない」ということだ。そもそも価値観とは、個人・社会における基本的な考え方のことである。ただし、哲学でいう価値観とは、社会的に見て正しいとされることであり、個人的、主観的な考えに基づく価値観のことではない。確かに、「人を殺していいのか」という問いに、ほとんどの人が「いいえ」と答えるだろう。しかし、これは社会的に見た価値観であり、人によっては、「人を殺してもいい」と答える人もいる。哲学について考えるには、このことを理解しておくべきだ。

コメント [y35]: 印象に残った理由を書いてください。

コメント [y36]: そういう人がいるからといって、人を殺してもよいということになるのですか？

今回の授業では、まず哲学のそれぞれの時代での位置づけについて学んだ。西洋思想の三本柱はプラトン、アリストテレス、キリスト教である。物体はどうして法則に従うのか？という問いに対し、神が法則を作ったからという答えがでたように、近代哲学は神の意図に迫る目的で発展していった。

1970年頃、哲学について人生観・価値観の意味付けがされた。

次に2つの「正しさ」について。

Trueは真理を意味し、自然科学での正しさ(=言葉と物の一致)を表す。対してRightは正当・公正を意味し、倫理的な正しさを意味する。

また、国が違くと法律は違ってくるか？という問いに対し、価値も普遍が志向されるため小さい違いはあるにしろ大まかには変わらないということも学んだ。

西洋哲学は、「プラトン・アリストテレス・キリスト教」が大きな三本柱であ**ら**る。特に中世の哲学は、全知全能且つ無限のキリスト教の神と、第一原因・不動の動者であるアリストテレスの神の整合性を**確認す**るためのものだった。そして近代の科学は、神の創造の原因に近づこうとして発展した。「哲学」という訳語自体、比較的最近の言葉であるが、それに「人生観・価値観」という意味がついたのは1970年代である。もともとの哲学は自然科学であり、多岐にわたる学問を包括していたが、学問の分科の影響でこのようなことになった。「価値観」という言葉が出てきたが、それは果たして各人によってちがうものなのだろうか。価値観といっても、社会的なものや個人的なものがあり、社会的であれば同一の規範を内面化するので、個人間での価値観の乖離はさほど見られないが、個人の趣向などであればやはり価値観は変わってくる。社会的であったり、道徳的な価値観は国によって変わるということも少ないので、普遍的で共有された規則がそこにあるといえる。戦後の日本では、戦前の「価値観のおしつけ」「権力への服従の強制」といった教育への反省から、「人それぞれ」教育を重視してきたが、**その言葉自体かなり漠然としたものなので**最終的には失敗という結果に帰着することとなった。

講義は勿論のこと、途中にちょこちょこ挟んでくれるエピソードのようなものが大変興味深かった。特に、沈没船から発見された**機械**の話は、昔の人の飽くなき探求心を垣間見たようで感動した。今後もこのようなエピソードを聞かせてほしい。

私は大学に入るまで、社会・国家というマクロな視点であれ、個人対個人というミクロな視点であっても、単純な「正義、公平、平等」という定義に対して多様な解釈が生まれることに対して、なぜ普遍的な概念であるべき事柄にここまで違う解釈が生まれるのか疑問でした。

しかし同時に決して文化的交流のなかったであろう違う文化圏であっても、同じ思想や伝承が生まれるのかということも私の抱えていた疑問の一つでした。

今回この講義を受け、何故人の思想の多様性や普遍性が同時に存在するのかという問いに対しての一つの**答え**を得たように**思います**。

今回は、多くの人は社会の規範を内面化するので価値観がそれほど個人で変わることはないということや、どの国でも禁止されていることはほぼ同じで、他の国で法律で禁止されていることは、それが禁止されていない国でもやはり悪いこととしては捉えられていること、どんな行動が人を傷付けるかは文化によって異なるが「人を尊重する」ということは同じ、ということなどを学んだ。

コメント [y37]: 違います。「人それぞれ」と言っていると、特定の価値観を押し付けてくる人をとどめることができないからです。

コメント [y38]: アンティキティラの機械ですね。ウィキペディアに写真が掲示されています。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/アンティキティラ島の機械>

コメント [y39]: どのような答えを得たのか、書いてください。

私はこれまで転校などの経験をしてきたので自分の常識が通じなかったり周りの考え方が理解できないことがあった。また、外国の文化を学んで日本との考え方の違いにとっても驚いたことがある。例えば日本では周りに合わせるのがよいことで、アメリカでは自分のことは自分で決めるのがよいことである、など。さらに、徳大の総合科学についての説明にも「多様な価値観を受け入れられる人材を育てる」と書いていたことなどから、価値観は人によってそれぞれで、それらを理解していくことが大事なのだと考えていた。なので価値観が同じと言われてもあまり納得することが出来なかった。

私の言っている価値観と先生の仰っている価値観は違うのかと思い Wikipedia で調べてみると「何に価値があると認めるかに関する考え方[2]。価値(善・悪、好ましいこと・好ましくないこと、といった価値)を判断するときの根底となる 物の見方[2]。ものごとを評価・判断するときに基準とする、何にどのような価値がある(何には価値がない)、という判断」と書いてあった。

先生の仰る価値観とは、人を尊重するなど、とても根本的なことであって、やはり好ましくないものなどの価値観は国によって異なる。アメリカで人に合わせたりあまり意見を合わないでいると、自分の意志を持っていないし、何を考えているか良くわからないやつだと思われがちである。

アリストテレスは「地球天体のような動いている物体」に対して、「なぜ地球天体は動き続けているのか、動き続ける目的があるのではないか」というような「経験主義的根拠」を探求し、あらゆる事物の根源を研究してきた。彼の考える「神」とは、「動いている物体」の動力となる「不動の動者」であって、善美である。一方キリスト教の考える「神」とは「創造神」であり、全知全能であるがゆえに「『神』が創り出した規則(物体の持つ普遍的な法則)」が自然に存在する。互いの意見を整合させようとするに関する議論がは夫昔から今日まで12世紀から13世紀にかけて繰り返されてきた。が、どちらかが「正しい」ということはなく、二つの意見が柱となって、キリスト教的な創造神を前提として、今の自然科学を作り出してきた。「どちらが正しいか」ということは、果てしない議論が続いてきたがゆえに、決定することが一概には言えないという結末が、普遍的な事実である。

「正しさ」という概念には二つの側面がある。一つは「言葉と物の一致」。世界に広く出回っている普遍的な事実(例えば地球は丸い等)は、誤解が生まれにくい限り人はいるかもしれないが、その事実は「正しい」として存在する。もう一つは「倫理的な正しさ」。「自分にとって」これが正しい、というような個人的な道徳感情や価値観は抜きにして、社会において共有された規範(例えば、ごみをポイ捨てしない等)は、世界中に広がっている。「この国ではこんなルールがあって・・・」ということは少しはあるといえども、一般的に禁止されていることは世界でも共通事項、万国共通の規範があるということだ。

コメント [y40]: 日本でも、周りの人の様子をうかがうばかりではっきり決められない人はやはり「よくない」と思われるのではないですか？また、アメリカでも、周りを全く無視して勝手に決める人は、やはり良くないと思われるのではないですか？「周りの人たちの判断や感情を尊重すること」「自分の意志は自分で決めること」の両方もがポジティブな価値を持っており、違いはそのバランスにあるだけではないですか？

コメント [y41]: どうして自分と私の考え方の違いを調べるために、私の考えが書かれていない Wikipedia を調べたのですか？授業の資料を見直した方がよいのではないですか？あるいは私の書いた『人をつなぐ対話の技術』を読んでください。生協で売っています。

コメント [y42]: 自分がこれまで考えていたことを単に確認して終わりにするのではなく、私がどのようなことを言おうとしているのか、徹底的に考えてみてください。それが「他の考え方を理解する」ということです。

コメント [y43]: そのようなことは述べていません。

価値も、普遍が志向される事実から、社会全体が過つ場合があると学んだ。例えば今日の社会問題となっている IS によるテロ運動や北朝鮮問題は、もはや「国」それぞれの価値観というカテゴリーに分類される。国内で統一された事項は、その「国」の「規範」になる。「人を尊重すべし」のような世界的に普遍的な規範をもってしても、現状のように国際問題は起こっている。「人」それぞれの価値観は社会を成り立たせないが、「国」それぞれの価値観が現れた時、再び哲学史の事実に戻って再考する必要がある。

哲学と自然科学が分かれたのは歴史的な問題だ。19 世紀に学問も「分科した学問」へと変質していった。「正しさ」も true:真理や right:正当、公正と様々だ。国が違っても禁止されていることはおおむね同じ。

質問の必然性についてよく考えてから、質問をするべき。どうしても質問したかったら、授業の内容に少しでも触れさせなければいけない。

「正しさは普遍的」という考えもあるが、そうであるとみんなが同じことを正しいと認識するはずだが、しかし現実では正しさは人それぞれに異なっている。

正しさにも True:真理と Right:正当・公平とあり、True は自然科学における正しさ(=言葉と物の一致)を指し、Right は倫理学における正しさを示す。Right は個人的な道德感情に混同されやすい。また、慎右の色のように道徳的には何でもいいが規則に決められたルールもある。

日本語での「認識」は Knowledge と Belief 両方の意味で使うが、その二つは哲学では反対概念である。

今回の授業はまず前回の授業への学生からのコメントへの返答から始まった。次に「正しさ」について教わった。「True:真理」は自然学における「正しさ」、つまり言葉と物の一致であり、「Right:正当・公正」は倫理学における「正しさ」である。後者は個人的な「道德感情」と混合されやすいが、規約によって決められたルールである。そして、個人的な道德感情や価値観と社会的な規範とは異なる。多くの個人は社会的な規範(社会において共有された価値観)を内面化するので個人の価値観はそれほど違わない。「好み」は人それぞれで構わないが、「価値観が人それぞれ」ならば社会が成り立たない。

高校で倫理を学んでいなかった私にとって、理解するのが難しい内容が多かった。

コメント [y44]: 授業では、現実には異なっていない、という話をしました。

コメント [y45]: 具体的にどのような内容のどのような点がどうして理解しがたかったのか説明してください。毎回、きちんと理解して進むようにしてください。

第2回哲学・思想では、論理的な文章の書き方、哲学における神、「正しさ」などについての講義があった。

まず論理的な文章の書き方について。そもそも論文やレポートを書く際は、感想を書くのではなく意見を書く。また、その意見に対しての客観的な根拠や理由を自分が納得できるまで書き続ける。そうすることで自ずと論理的な文章になっていく。加えて、哲学・思想についての論文やレポートを書く際には、言葉の使い方には注意しておく必要がある。例えば、一口に「平等」と言っても、この言葉には、**金銭的な平等の意味もあれば機会的な平等の意味もある**。よって抽象的な概念の言葉を使う際には特に気を付けて使っていく必要がある。

次に哲学の神について。**自然科学からすると神は存在しない**。しかしアリストテレスは神について、第一原因・不動の動者・善美と考えた。また、キリスト教における神は、創造神・全知全能・善美と考えられた。この2つの考えをどう整合するかと議論されてきたことによって近代科学は発展してきた。

最後に「正しい」ということについて。正しいという言葉には様々な意味が含まれている。1つは true の意味で使うもので、言葉と物が一致している場合に用いられる言葉。もう1つは right の意味で、倫理的な正しさ、規約によって決定されたルールに対して使われる言葉である。ちなみに right の意味の「正しい」は個人的な感情は含まないので注意して使う必要がある。それでは、価値観は人それぞれなのだろうか?実は価値観というものには社会規範によって作られた物であるため、個人個人に大きな差はない。

今回の授業では、価値観というものは社会規範によって作られたものなので個人個人にあまり差はないという意見に賛成だ。なぜなら、人の価値観というものはその人自身の周りの環境によって形成されるからだ。例えば、**赤信号を渡ってはいけない**というのは、赤信号になったら渡ってはいけないという風に幼稚園のうちから先生に教えてもらってきたり、赤信号になると人や車は前に進むのをやめたりするというように、周りの環境の影響で出来上がってきたものであるからだ。「自己を形成するために環境は必要不可欠である。人間は自然環境から作られるといった場合、生きる土地の条件によって分布する動植物、水、太陽、空気の自然の作用を受けて生命を維持し成長発達することができる。」(伊藤いぢ代『人間の価値の形成過程について——三木清の思想を手がかりに——』Pp.1~2伊藤いぢ代、<http://atlantic2.gssc.nihon-u.ac.jp/kiyou/pdf03/25-263-2002-Ito.pdf> 4月23日閲覧)。「環境は生命の維持と自己の形成に大きく関わり、人間は環境を形成することによって、自己を形成していく」(『人間の価値の形成過程について——三木清の思想を手がかりに——』P264伊藤いぢ代、<http://atlantic2.gssc.nihon-u.ac.jp/kiyou/pdf03/25-263-2002-Ito.pdf> 4月23日)

コメント [y46]: 結果の平等、機会の平等、可能性の平等の三つを挙げました。

コメント [y47]: コメント y22 を参照。

コメント [y48]: これは「価値観」というよりは単なる便宜上の規範だ、と説明しました。

な意見もある。よって、私は価値観は社会規範や環境によって作られたものであるという意見に賛成だ。そして個人個人であまり差がないという意見にも賛成だ。

コメント [y49]: 単に「そういう意見もある」では根拠として薄弱です。複数の情報源を調べましょう。

<哲学とは>

哲学の神

プラトン・アリストテレス・キリスト教が西洋思想の三つの柱である。

中世哲学は、キリスト教とアリストテレスの整合のために行われたものである。

哲学と人生観

哲学について「人生観・価値観」などの意味が広まったのは、1970年代からである。

哲学と科学

哲学はもともと自然科学という意味であったが、19世紀以降、自然科学という言葉が使われ始めた理由

・19世紀以降近代的大学が設立され、学部・学科で専門分野が教えられるようになった。それに伴い、「大学教員=科学者」という職業が成立した。結果、学問も「文化した学問」へと変質していったため。

正しさについて

・True:真理

→自然科学における「正しさ」=言葉とモノの一致

・Right:正当・公正

→倫理学における「正しさ」(個人的な「道德感情」と混同されやすい)

価値観について

道徳的な正しさとは、社会的な規範(社会において共有された価値観)。

多くの個人は社会的なきはんを内面化するので、個人の価値観もそれほど違わない。

→価値も普遍が志向される(社会全体が過つ場合もある)

意見・質問

真理という意味での正しさがよくわかりませんでした。猫に「お前は犬だ!」といっても猫は猫なので変わらないということでしょうか。

コメント [y50]: 具体的にどこまでは分かったが、どこがどうしてわからなかったのか説明してください。

それから、まとめは箇条書きでなく、文章の形で書きましょう。

なお、「これは猫です」という言葉は、それが実際に猫であるときには正しく、実際には犬であるときには間違いだ、ということです。犬を前にして誰かが「これは猫だ」と信じたからといって、それは猫にはなりません。

コメント [y51]: どういう点がどうして違うのか書いてください。

今回の講義の内容をまとめる。西洋思想の3本柱はプラトン、アリストテレス、キリスト教である。加えて、正しさについて学んだ。哲学自然科学の正しさは真理の「true」であり、言葉と事物の一致である。また、倫理学の正しさである正当・公正の「right」とは別のものである。また、個人的な道德感情や価値観と、社会的な規範は異なり、社会におい

て通用する価値観が道徳的な正しさである。私達が持っている価値観も社会的な規範を内面化しているので、あまり違いはない。価値も、普遍が志向されるのである。

自分は哲学を学ぶ意味としては、万人が各々の思想を受け入れて、または取り入れて、共有し、平和で平等で住みやすい世界について考えていくことである、と理解していた。が、ただ単に「平和」や「平等」といっても世界中の全ての人が同じ考えを抱くわけではない。そこには、結果の平等や機会の平等や可能性の平等など様々な議論がある。

「正しさは普遍的」という考えがあるのなら、みんなが同じことを正しいと認識するはずである。しかし現実ではそうならないことが数多くある。「正しさ」といっても True 真理と Right 正当・公平の概念がある。前者は自然科学における「正しさ」であり、言葉と物の一致を示す。また、後者は倫理的な「正しさ」を示す。

価値観はやっぱり人それぞれか、という疑問については、個人的な道德感情と社会的な規範はやはり異なる。個人がものを盗んでもバレなかったら大丈夫と考えていても、社会的な規範から見れば、答えは万人に聞いても NO である。社会的な規範を離れた「好み」なら人それぞれで構わないが、「価値観」が人それぞれなら社会は成り立たない。例えば国が違えば法律がひっくり返るかと言ったらそうではない。どこの国に行こうとも人命を尊重すべしという概念は変わらないし、赤信号を行っても良しとする法律や気に食わなかったら人の命を奪って良いという法律が存在するわけがない。ならどうしてこの現代で価値観の「人それぞれ」がこんなにも蔓延しているのかと考えた時におそらく、戦前の価値観の押しつけや権力による強制への反省が影響している。

参考文献なども目を通したりして、もっと深く哲学について知っていきたい。

質問をする際には、授業に関連してなぜその質問をするのかを明確に説明しなければならない。

哲学において、プラトン(概念主義)、アリストテレス(経験主義)、キリスト教が西洋思想の三本柱である。アリストテレスの神は第一原因で、不動の動者であり、そこに時間は存在しないこの世界(宇宙)には始まりも終わりもない。一方キリスト教の神は、創造新神であり、全知全能・無限である。中世哲学はこの二つの諸学問を整合させるために行われた。近代科学は神の考えに迫るためのものである。

哲学を辞書で引くと「人生観」という意味を含むが、その意味が広まったのは 1970 年代ごろである。哲学はもともと自然科学という意味だったが、19 世紀に近代的な大学が設立されて、学部学科でそれぞれの専門分野が教えられるようになり、「大学教員=科学者」と

コメント [y52]: なぜそのように理解していたのか説明してください。また、その理解は正しい理解だったということですか、そうではなかったということですか？

コメント [y53]: コメント y43 を参照。

いう職業が成立したことによって、学問も「分化した学問」へと変質していった。

哲学において正しさは人それぞれである。自分の中では正しいと思っ

コメント [y54]: そうではない、と言いました。

ても、他人にとっては間違いだったり、NG だったりするからだ。しかし、「正しさ」にもさまざまあり、自然科学における「正しさ」は言葉とモノの一致である。倫理学における「正しさ」は正当、公正である。

価値も普遍が志向されるので、好みは人それぞれでも、価値観が人それぞれでは社会が成り立たない。価値観は社会や時代によって異なるというわけではないが、「人それぞれ」が蔓延しているのは、戦前の「押しつけ」「強制」への反省であるが、『人それぞれ』という言葉は、自分の意見を根拠づけて主張するという骨の折れる作業をしないで済ませてしまう言葉でもあります。(山口裕之『コピペと言われないレポートの書き方』新曜社、2013年おわりに、97p)。「人それぞれ」とは、実に無責任な自己責任論なのです。(『コピペと言われないレポートの書き方』おわりに、~~ibid.~~ 98p)とあるように、その言葉で対抗してはいけ

ない。

今回の授業は、前回のコメントからの質問に答えて哲学について学ぶというものだった。この授業の要点は「個人的な道德感情や価値観と社会的な道德規範とは異なる」という部分であるといえる。その根拠として、授業の中で「好みは人それぞれで構わないが、価値観がそれぞれなら社会が成り立たない」とあり、もし道德感情や価値観と社会的な規範が同じであれば社会が成り立たないといえる。このことから、個人的な価値観と社会的な規範が異なることを理解するということが重要である。

今回の授業では「正しさ」の様々な捉え方について学んだ。高校の倫理で知った多くの哲学者が、先人である哲学者に対する批判から自らの考えを展開していた。しかし、社会において共有された価値観のもとでの「正しさ」は誰でも、どこの地域でもある程度共通する。これが共通しなくなったとき、狭い社会では「礼儀がなっていない」程度にしかみなされないのだろうが、国際的には戦争や紛争に発展する恐れがある。過去の宗教戦争などにみられるように、自分が信仰する神のみが正しく、他の信仰はすべて正しくないから排除するといった考えがあったからだ。

コメント [y55]: コメント y17 を参照。

授業の要点は、自然科学的に見て神は存在しないこと、「正しさ」といっても様々で自然

コメント [y56]: コメント y22 を参照。

科学における正しさと倫理学における正しさが違うように立場などによって変わること、認識にも knowledge と belief があることだ。

学問的な神について西洋思想ではプラトン・アリストテレス・キリスト教が三本柱と言っていたが、**八百万の神**という言葉があるほど日本には多くの神が存在し学問を司る神も多い。その中でも日本で大きな柱となっているものについては先生はどう考えますか。

コメント [y57]: コメント y8 を参照。

前回のまとめ

哲学(philosophy)の語源は、「知識愛好」というギリシア語である。「知識」としては、およそすべての学問領域を網羅する。そして、「知識」は普遍を目指す。

哲学でいう神とは

学問的な神とは、「プラトン・アリストテレス・キリスト教」が**西洋思想の**三本柱となっており、中世哲学では、キリスト教とアリストテレスの諸学問を整合させるために行われていた。その中でも、アリストテレスの神**である**は「第一原因・不動の動者・善美」を、キリスト教の神**である**は「創造神・全知全能・無限・善美」と**整合させることが重要な問題だったを表している**。しかし、そもそも**自然科学的に見て、神というものは存在しない**。だが、近代科学は神の創造の意図に迫りたいという動機で成立している。

コメント [y58]: コメント y22 を参照。

哲学と人生観

哲学を辞書を引くと「人生・世界、物事の根源のあり方・原理、理性によって求めようとする学問。また、経験から作り上げた人生観」とある。しかし、哲学について「人生観、価値観」などの意味が広がったのは 1970 年代ごろであった。19 世紀以前の哲学は自然科学という意味でつかわれていたが、19 世紀に「分科した学問」への変質の影響を受け変化していった。

人それぞれの「正しさ」と価値観

「万物の根源は水」と考えたタレス、「万物流転」と考えたヘラクレレスなど、正しさは人によってことなる。だから、自分の中では OK であっても他者からしたら NG、などの善悪、正義非正義は人それぞれである。それに加えて、国が違えば法律も違い、日本では許されていることが禁止されている国もある。ただし、国が違っても「禁止されていること」はおおむね同じであるように、「価値観や規範は社会や時代によって異なる」というわけではない。しかし、社会全体が過つ場合もある。

コメント [y59]: これらは学生のコメントです。こうした考えが間違いであることを授業では説明しました。

「正しさ」は人によって異なるというのと同じように「正しさ」と言っても様々な意味がある。例えば真理(True)の例を挙げるなら、自然科学における「正しさ」は言葉と物の一致である。正当や公正(Right)では倫理学における「正しさ」がある。ただし、この正当や公正は個人的な「道徳感情」と混同されやすいほか、規約によって決められたルールもある。

社会全体が過つ場合は自分が過っていることに気づける可能性は低いのになぜ気づけるのだろう。その理由として「いろいろな社会とのつながり」が深く関係している。例えば、日本における「男尊女卑」の考えである。これは昔の日本では当たり前の考えであったが、国際連合などによる女子差別撤廃条約などによりその考えが覆された。このように多くの社会とかがかわれば覆され正されることもある。

コメント [y60]: 哲学をはじめとする学問を学び、知識を体系化し、判断力を身につけることによってです。

コメント [y61]: 具体的に何とどのようにつながることですか？

今回の講義は、いつも口にしていて言葉は哲学的に考えればはっきりとした意味を持たなかったり、多義的にとらえられてしまったりすることを教わりました。僕は授業中に話題になった「平等」という言葉をずっと考えていました。しかし、そこまで「平等」を求めているのに日本は、社会主義にはならなかったのだからと考えました。そう考えたのは、現状である資本主義では経済の格差が課題となっているからです。

コメント [y62]: それで、どうして社会主義にならなかったのですか？（これは歴史的な事実に関する問いですから、頭の中で考えても答えは出てきません）。

コメント [y63]: この授業は学生からのコメントを中心にしつつ、新たな概念を導入していく、と説明しました。

前回の授業の復習、またそれについての意見や質問への回答でほとんど一時間が終了してしまいました。

哲学の授業内容は先人達による「認識」の話があった。（猫に似た犬を猫と認識すると猫になるか等）

また、いわゆる現象の始まりとなる「神」のようなものはあるか、そしてそれを先人達はどう捉えていたかの話もあった。

しかし、何事の始まりも必ず誰かないし何かが科学的、物理的に説明できる行為や現象があるはずであり「神」のような抽象的なものが始まりを作ったと考えた先人達には疑問を抱いた。

具体的な内容が書かれていません。学んだことをもっと具体的に書くようにしてください。

今回の授業で、近代科学は、神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。また、個人的な道徳感情と社会規範というものは異なり、価値も普遍が志向され、価値観が人それぞれだと社会が成り立たなくなる。そして、国が違って、「禁止されていること」は変わらないことを勉強した。「スミスの言うように、利己的な振る舞いが社会の利益につながる場合も確かにあるでしょう。しかし、利己的な振る舞いが社会の不利益になる場合も当然ながらあるのです。」（モト、「日本式論アダム・スミス『道徳感情論』」、<http://nihonshiki.sakura.ne.jp/economics/AdamSmith01.html>、4月23日閲覧）。

コメント [y64]: これは何者ですか？哲学の研究者ですか？

コメント [y65]: 具体的にどんな利益・不利益ですか？

道徳感情と社会規範が同じものになると、利益につながる反面、不利益につながる可能

性も生まれる。よって、不利益を被らないために、道徳感情と社会規範は同じにしてはいけない。

プラトンは概念から理解をしていく人で、アリストテレスは経験したことから機能帰納的に考える人である。人には考え方が色々あり、正しさは人それぞれである。正しさには、真理としての「正しさ」と正当・公正としての「正しさ」がある。

真理としての「正しさ」は自然科学や物理的な現象から正しさを見出すため、色々な考え方があっても、たどり着く「正しさ」はひとつであるが、正当・公正としての「正しさ」は、倫理学における正しさであるため、大まかに違いはないが人それぞれ、また団体や国家それぞれに考えがある。例えば、キリスト教のなかでは正しいと思われていることでも、キリスト教の人が違う宗派にいけばその考えは正しくなくなるといったように、正当・公正としての「正しさ」は社会的規範内ではそれほど違いはないが、社会的規範外だと違いが出てくるため「正しさ」はそれぞれある。好みは人それぞれで構わないが、社会的な規範の中で人それぞれに価値観があると社会は成り立たなくなってしまう。したがって、個人的な道徳感情好みを持つのは良いが、規則によって決められたルールや社会の中で正しいと思われていることにはきちんと従うことが、社会が成り立つということになる。

近代科学には、神の創造の意図に迫りたいという目的があった。不変普遍である自然の法則は神がつくったものだと考え、なぜそうしたのかを知ろうとした。近代科学と名付けたうえで学問の目的を定めたのではなく、目的へと向かい学んでいくうちに学問として名称づけられたのである。

私たちが生まれたときから「自然科学」は存在していて、自然の法則はあって当たり前のもだった。法則を神がつくったという発想は独自のものだが、運動の原因は何なのかという問いの答えとしては適当である。神かどうかは確かめられずとも、原因には何らかの存在がある。キリスト教と密接に関連していた西洋哲学において、第一原因が神であるという結論に至ったのは当然の帰結であると言える。

「プラトン・アリストテレス・キリスト教」は西洋思想の三本柱であり、中世哲学はキリスト教とアリストテレスの諸学問を整合させるために行われた。近代科学は神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。「正しさ」といってもさまざま、True(真理)は自

コメント [y66]: そうではない、という話をしました。

コメント [y67]: 具体的にどのようなことですか？

コメント [y68]: どういうことですか？

コメント [y69]: 誰に独自ですか？

コメント [y70]: なぜ適当なのですか？

コメント [y71]: アリストテレスの考え。キリスト教以前。

然科学における「正しさ」=言葉と物の一致を意味し、Right(正当、公正)は倫理学における「正しさ」を意味する。しかし Right(正当、公正)は個人的な道德感情と混同されやすい。道徳的な「正しさ」は社会的な規範(社会において共有された価値観)である。「価値観や規範は社会や時代において異なる」というわけでもない。

私は今日の講義を聞いて、「正しさ」という言葉に、少しニュアンスの違う複数の意味があることに納得した。

今回の授業は前回の授業コメントをもとに行われた。まずコメントについては「なぜ」という問いには様々な答え方があり、授業との関連も含めて質問の仕方への指摘があった。次に哲学の神は「プラトン、アリストテレス、キリスト教」を西洋思想の三本柱として持ち、アリストテレスは神を第一原因、不動の動者、善美とし、キリスト教における神は創造神、全知全能、無限、善美として扱われ近代科学は神の創造の意図に迫ることを動機に成立した。

また正しさは一般的に自然科学における「正しさ」、言葉と物の一致を意味する真理と、倫理学における正しさ、社会的で個人の**範囲権限**で決められない正当・公正の二つがある。後者は個人的な道德感情や価値観とは違い規約によって決められたルールとしての側面も持つ。価値観や規範は場所、時代を変えても概ね同じであり価値も普遍が志向される。

哲学と科学において自然科学が哲学から切り離されたのは近代的な大学が設立され学問が分科されたからだと言っていた。大学の制度化が学問に与えた影響は**他にありますか**。

コメント [y72]: あります。

私は、今回の講義で「正しさ」ということについて考えさせられた。「正しさ」には、個人の感情や価値観によって変化するもの、社会一般のルール**の2つ**がある。

現在、社会一般のルールが間違っている国が多くある。日本では、戦争は、起こしてはならないものだ**という考えが根付いているが**、中東地域では、一般市民に被害が出ているにもかかわらず、上層の人々の中に戦争は正当である**という考えを持つ人も**いる。そこでは、**国内でのルールが誤っており、誰もそのことに気付かないために戦争が続いている**。

私は、これから学ぶことが、世界中の人々と分かり合えるものだと信じて勉強していきたい。

コメント [y73]: そんな単純な話ではありません。それぞれの戦争や紛争について、なぜそれが起こっているのかを考えるためには、それぞれについて具体的に調べなくてはなりません。

今回の授業の要点は、哲学における神・True と Right であった。中世哲学は、神を創造

神であり全知全能であるものとするキリスト教と神を第一原因であり不動の動者であるものとするアリストテレスの 2 つの諸学問を整合させるために行われた。また、近代科学は神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。そして、正しいといってもさまざまであり、True は自然科学の正しさ(=言葉と物の一致)であり、Right は倫理学における正しさである。

言葉の概念にもいろいろあり、今回の授業で出た「幸福」や「平等」にはたくさんの理解があった。「平等」には授業で出た、結果の平等・機会の平等・可能性の平等などがあるが、それでは「幸福」にはどのような理解があるのか。幸福とは、

「現在(に至るまで)の自分の境遇に十分な安らぎや精神的な充足感を覚え、
あえてそれ以上を望もうとする気持ちをいなくとも無く、現状が持続してほしいと思うこと(心の状態)。」

電子辞書版 新明解 国語辞典 第七版 三省堂

とある。「幸福」の大まかな意味は辞書に書いてある通りだが、現状が持続してほしいと思える安らぎや充足感が何かまでは明記されていなかった。

安らぎや充足感については国連の「持続可能な開発ソリューション・ネットワーク(SDSN)」によって発表される「世界幸福度ランキング」の採点基準を参考にしてみる。東洋経済によると、

「156カ国を対象に、1人当たり国内総生産(GDP)、社会支援、健康余命、社会の自由度と寛大さ、汚職の頻度などについて分析。」

ロイター 東洋経済 ONLINE 国連「幸福度ランキング」、日本は 54 位だった
首位はフィンランド、最下位はブルンジ <https://toyokeizai.net> 閲覧時 2018/4/23
であった。

Wikipedia には細かなことが書かれており、幸福度を 6 つの説明変数で分析、

「説明変数は(1)人口あたり GDP(対数)、(2)社会支援(困ったときに頼ることのできる親戚や友人がいるか)、(3)健康寿命、(4)人生の選択の自由度(人生で何をするのかの選択の自由に満足しているか)、(5)寛容さ(過去 1 か月の間にチャリティ等に寄付をしたことがあるか)、(6)腐敗の認識(不満・悲しみ・怒りの少なさ、社会・政府に腐敗が蔓延していないか)の 6 つであり、回帰分析で得られるこれらの説明変数の幸福度に対する寄与が与えられている。」

世界幸福度報告-Wikipedia <http://ja.m.wikipedia.org> 閲覧時 2018/4/23
としている。このランキングは世論調査のようなものなので、主観的な値ではあるが、幸福度を 6 つの説明変数で分析している。この 6 つの説明変数が国連にとっての幸福の考え方である。

コメント [y74]: 国連が「幸福」をどのように考えているのかを知りたいければ、さらに、なぜこの 6 つが説明変数に選ばれたのかを調べてみるとよいでしょう。

今回の講義は論理的な思考力と、物事を多面的に理解する、正しく理解すること、正しく考えることが要点であると私は考えた。論理的な思考力があっても、一つの物事を多面的に理解する能力がなければ、自分の考えを相手に納得させることはできない。また、反対に物事を多面的に理解する能力が最初から備わっていたとしても論理的な思考力がなければやはり、自身が理解しただけであり、必要な情報や伝えなければならないことは誰にも伝わることはない。この二つは両方もたなければ、全ての事柄を本質的に理解することはできない。

私たちが生きる世界には自分以外にも非常に多くの人間が生きている。70億以上の人間が生きる世界で、すべての人間が同じ考えをもっているものは存在しないのではないだろうか。むしろ、「似ている考え」はあったとして、「100%」自身と同じ考えをもっている人はいないだろう。

これは歴史的な観点でも同じことがいえるのではないだろうか。私が高校生の頃、2度カンボジアを訪問した。そのカンボジアではポルポト政権の際、歴史に大きく刻まれることとなる大虐殺が行われた。現代の私たち、そしてその時代を生き、虐殺される側であった人間からすれば残虐極まりない、非道な行為だ。だが、ポルポト政権としてはそれは自分なりの正義に忠実に従った行動だ。多くの方面から考える力があれば、誰一人として虐殺されることはない未来もあったかもしれない。このように、一方から見れば残虐に見えるものも、他方から見れば正義にもなりうるのだ。

物事を多面的に正しく理解し、論理的な思考力で正しく考えることは、争いを避けるなどといったものもあるだろうが、日常的な部分であれば人とのコミュニケーションにもとても大切なものだ。自分だけの主観だけでなく、様々な方面から捉え、考えることができれば、様々な考えをもつ人たちとかわかることができる。私も、総合科学部でこの総合科学的思考を身に着け、深める学びを行っていきたい。

平等は大切だが平等であることに固執しすぎると経済が発展せず、国にとってマイナスな要素となってしまう。だから平等と自由競争から生じる不平等を対義的に捉えないことが大切だ。社会生活を送る上で普遍的な価値観を持つ必要があるが、国によってその価値観が異なることから国同士の意見の食い違いや戦争が起こるのではないか。よって国によって普遍的な基準が異なることを理解することが大切なのではないか。

「なぜ」という質問をする際には、どういう解答を求めているのかをはっきりさせるのが大切である。なぜなら「なぜ」という問いには、「目的、動力、材料、形相」(アリストテ

コメント [y75]: 総合科学入門講座へのコメントのようです。

コメント [y76]: 具体的にどのように捉えるのがよいですか？

コメント [y77]: 疑問の言いっぱなしはやめましょう。

レスの四原因説)という様々な答え方があるからだ。

「平等」や「幸福」などの抽象的な概念は使っていると、議論から具体性が失われてしまう。「平等」という言葉にもたくさんの意味が含まれているので、自分がどの意味で使っているのか気を付ける。

価値観は人それぞれではないかという疑問があるが、多くの個人は社会的な規範を内面化するので、個人の価値観もそれほど違いがなく、そもそも価値観が人それぞれだと、普遍的な正しさがなくなり、社会が成り立たなくなるということを学んだ。

今回の授業を通して正しさ好みは人それぞれであるが、だからといって自分の勝つばかりしていいわけではなく社会的規範を守ることが大切だと思えました。

また、個人の価値観は社会的規範を内面化するためそれほど個人間でかけ離れたものではないとわかりました。

私は個人の正義がバラバラだと社会が成り立たないというのに納得しました。

人を殺めてはいけない、人を大切にするなどすべての人が共通で持つべき価値観はおおよそ同じであり、そういった行為は法律で取り締まられているからです。

質問をする必然性を示す。正しさは人それぞれではなく、真理と公正がある。価値観も共通のものである。

日本で哲学または哲学のようなものは発達しなかったのか。今ある哲学は土台に西洋思想がある。日本の哲学は西洋文化が入ってきてからは発達している。日本の哲学も、西洋思想が基礎になっている。または西洋的思考や観点から日本を考えている。また文明開化以前にも思想はあったが、哲学(理論的に世の中をみたもの、数学的科学的に考察したもの)はなかったのか。そもそも理論的とゆいいうのが西洋の発想であるともいえる。

予想

似たようなものはあってもそんなものはない。日本は合理性より感性の方を大切にしている。

例、郷土芸能などでも、最近は西洋的方法(きっちり構築された楽譜、指揮者、演奏方法など)を取り入れている場合もあるが、大体は理論的ではなく、考えるのではなく体覚えこむ。言わなくても意味が通じることがある(主語や目的語が抜けている)

これらからして西洋のようなかっちりした理論が発達しづらかったから、日本では西洋ほどの発展はなかった。文明と思想はセットで発展する。

コメント [y78]: なぜそう言えるのか説明してください。

コメント [y79]: 予想が事実かどうか、きちんと調べて検証しましょう。

今回の講義では、哲学の意味、哲学の神について学んだ。まず哲学とは自然科学という意味だったが 19 世紀以降哲学という言葉が使われるようになり、学問も分化した学問へと変質していったと学んだ。次に哲学ではプラトン、アリストテレス、キリスト教が西洋思想の三本柱であり、近代科学は、神の創造の意図に迫りたいという動機で成立したということ学んだ。哲学の学びで多面的な理解を深めていきたい。

不動の動者とは、最初の原因は動かないが、他の物を動かす原因となる神のことをいう。「アリストテレス哲学における「不動の動者」を中心とする哲学思想のうちに、現実の宇宙におけるあらゆる事物の因果系列をさかのぼっていくことによって第一原因としての神の存在を論証するという宇宙論的証明の原型となる神の存在証明の議論を見出すことができると考えられることになるのです。」

tantan 『宇宙論的証明とは何か』 <http://information-station.xyz/8079.html> 4/22

つまり、アリストテレスはこのように宇宙論と絡み合わせ、科学的に神の存在を証明したのである。

今回の授業では、平等とは配分の公平さであり、哲学について「人生観、価値観」という意味が広がったのは 1970 年ごろだということも教わった。また、True と Right の違いについても学んだ。

なぜ、哲学という言葉に人生観という意味がついたのか。

コトバンクのデジタル大辞泉の解説によると、人生観とは「人生に対する見方。人生の目標・意味・価値などについての全体的、統一的な見方で、人生とは何か、人生いかに生きるべきかについて、具体的、実践的な記述・指針を含む。」とある(コトバンク,人生観とは-コトバンク <https://kotobank.jp/word/人生観-82040> 4/23 アクセス)。また、哲学については、「世界・人生などの根本原理を追求する学問。」とある(コトバンク,哲学とは-コトバンク <https://kotobank.jp/word/哲学-101028> 4/23 アクセス)。

人生観の人生いかに生きるべきかについての具体的、実践的な指針を深く考えることが哲学の根本原理を追求することに結び付いたのではないだろうか。

コメント [y80]: なぜこの問題を提起するのか、理由を書いてください。

コメント [y81]: 疑問の言いっぱなしはやめましょう。

今回の講義のキーワードは「正しさ」、「価値観」になるだろう。「正しさ」と一言でいてもさまざまである。自然科学における「正しさ」とは言葉と物の一致である一方で、倫理学における「正しさ」は個人的な「道德感情」と混合されやすい。価値観好みはやはり人それぞれでありだが、道徳的な正しさは社会的な規範なので、個人が勝手に決めてよいわけではないになる。国が違っても価値は普遍が志向され、社会全体が過つ場合もあるのだ。

普通、普遍的なことが正しいとされるが実際はその正しさも、人それぞれ違う。「正しい」とは本来、定義や規則にかなって誤りがないことを意味する。しかし、定義や規則を定める人と守る人では少なからず価値観が異なる。規則を守るから正しい、ルールを破るから間違っているという理念は正当であるように思うが、そもそもその定義が人によって違うのだから、規則やルールは集団生活が上手くいくためのものであって、一概に正しさとは言えない。そうすると正しさは人によって異なっていると言える。

コメント [y82]: 「価値観」と「正しさ」は別のものです。「正しいと思う」と、「正しい」ことも別です。「規則を守らないでよい」という「価値観」は、「正しくない」でしょう。

要点

正しさは普遍的である

意見

論理的思考を用いて説得力のある文章を書きたい。

コメント [y83]: これは意見でなく単なる決意表明です。

今日の講義では哲学について様々なことを学んだ。

神というのは自然科学的には存在しない。西洋思想の三本柱はプラトン・アリストテレス・キリスト教であり、中世哲学はキリスト教とアリストテレスの諸学問を整合させる為に行われた。

プラトンの思想とキリスト教を合わせたものがヨーロッパの古典となり、アウグスティヌスが例としてあげられる。アリストテレスの思想とキリスト教が合わさったのが17世紀ごろである。

近代科学は、神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。

また、正しさといっても様々であり、自然科学における正しさ(true)は言葉と物の一致である。

倫理学における正しさ(right)は個人的な道德感情と混合されやすい。

しかし、信号機のように道徳的には何色でも良いが、規約によって決められたルールもある。

個人的な道德感情や価値観と社会的な規範とは異なる。

コメント [y84]: コメント y22 を参照。

道徳的な正しさとは社会的な規範、社会において共有された価値観である。

好みは人それぞれでいいが、価値観が人それぞれなら社会が成り立たない。

国が違っても、禁止 ~~+~~ されていることはほとんど同じで、人を尊重するべきであるという原理はどこでも同じである。つまり、価値は普遍が志向される。

しかし、社会全体が道を踏み外す場合もある。

では、いつ頃から人を尊重するべきであるという原理が確立されたのか。

私は、第二次世界大戦後であると **考える**。**なぜなら**、大きな傷を残した戦争が終わり、平和や人の存在の大切さを認識することになったからだ**と思う**。

コメント [y85]: 「〜と考える。なぜなら〜と思うからだ」では、客観性がありません。理由や根拠は自分の頭の中だけで考えるのではなく、きちんと調べましょう。

今回の授業では、西洋思想の三本柱は「プラトン・アリストテレス・キリスト教」で、中世哲学はキリスト教とアリストテレスの諸学問を整合させるために、近代科学は神の創造の意図に迫るために成立したことを学んだ。また、正しさには「真理」や「正当・公正」などのさまざまな意味があり、価値観は多くの個人が社会的規範を内面化するためそれほど違いがないということ学んだ。

私は、「価値観は人それぞれでなく、全く異なるというわけではないがそれほど違わない」ということには賛成である。しかし、「価値観や規範は時代によって異なるというわけではない」ということには疑問を抱いた。時代や社会の変化によって、価値観は変わるのではないだろうか。たとえば、現代と第二次世界大戦期とを比較すると、第二次世界大戦期には、**国のため、天皇のためなら戦えるという人も多かった**が、現代の日本人は「国のために戦う意思があるか」というアンケートによると意思がある人が 10%、ない人が 43%だった(WIN/Gallup International, END OF YEAR SURVEY 2014, 4月22日アクセス)。たしかに、戦争があった時期にも殺人などの犯罪をしてはいけないということや、戦争に対する批判的な考えを持つ人もいたが、大多数の人の意見の変化はありとみられる。このことから、**時代によって価値観は異なる**。

コメント [y86]: このことの根拠は何ですか？アンケート調査をもとに考察するならば、アンケート調査同士を比較しなければなりません。

コメント [y87]: もしも現在、日本が戦争を始めたとしたら、多くの人が戦う（あるいは本人の意思にかかわらず戦わされる）のではないのでしょうか？また、「自分たちの国や仲間を守らなければならない」という点では、そんなに変わっていないのではないですか？

「正しさ」というものもさまざまであり自然科学における正しさ、つまり真理と、**また**倫理学における正しさ、つまり正当・公正にわかれている。また価値観というものは人それぞれみんな違うものである**—**と理解してはならない。なぜなら個人的な道徳感情や価値観と社会的模範は異なるからだ。私たちは社会の中で共有された価値観の中に生きている。そのため個人的には人を殺めることや物を盗むことが **OK** だと思っても実際社会では絶対に通用するものではない。**そのため**多くの個人は社会的な模範を内面化するもので、それにより個人の価値観もそれほど実は違わないものである。

「プラトン・アリストテレス・キリスト教」が西洋思想の三本柱であり、中世哲学は、キリスト教とアリストテレスの諸学問を統合するために行われた。また、近代科学は、神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。詳しくみると、19世紀には近代的な大学が設立され、学部・学科でそれぞれの専門分野が教えられるようになった。そこから学問も分科したものへと変わっていったのである。

前回、「正しさは普遍的」であるとしたが、「正しさ」もには「True(真理)」であつたりと、「Right(正当・公正)」であつたりとという二つの意味がある、その実、様々である。前者は自然科学における「正しさ」で、つまりは言葉と物の一致を意味するが、後者は倫理学における「正しさ」、もしくは規約によって決められたルールのことである。また、価値観は人それぞれのように思いがちだが、個人的な道德感情や価値観と社会的な規範とは異なる。「好み」は人それぞれで構わないが、「価値観」が人それぞれなら社会が成り立たない。そして、「価値観や規範は社会や時代によって異なる」というわけではなく、価値も普遍が志向される。

「なぜ」という問いには、目的・動力・材料・形相といった様々な答えがあり、質問の際はその点に気を付けなければならない。日常においても、「正しさ」の多様性に観点をおいて物事を思考することが大切だ。

哲学における「正しさ」は、True(真理)と Right(正当・公正)に分けられる。まず、True(真理)とは自然科学における「正しさ」であり、言葉と物が一致するということである。一方、Right(正当・公正)とは倫理学における「正しさ」であり、個人的な道德感情と混同されやすい。信号の赤のような規則によるルールもこれに含まれる。

今回の講義で哲学における「正しさ」を学び、普段自分が何気なく使っている一つの言葉から こんなにも深い考察ができるのだという発見があった。

コメント [y88]: 具体的にどんな考察なのか書くようにしてください。

中世哲学は、キリスト教とアリストテレスの諸学問を整合させるために行われた。これは中世哲学の課題でもあったのである。

哲学者は自然科学も研究する。研究を進めると法則が見えてくる。そして、その法則は神が作ったと考えられた。

アリストテレスは、全ての運動には目的や原因があると考えた。彼は、その第一原因が

神であると考えたのである。彼にとっての神は、第一原因に加え、不動の動者であり、善美でもあった。そして、キリスト教における神は、創造神であり、全知全能、無限で、善美であった。善美であるところは両者ともに共通している。ちなみに、近代科学は、神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。

また、「正しさは人それぞれ」という人が多いが、「正しさ」と一言で言ってもそれは様々である。大きく「True」と「Right」の2つに分けられる。「True」の「正しさ」とは、真理を表す。自然科学における「正しさ」であり、言葉と物が**必ずの一致という意味である**。

それに対して、「Right」の「正しさ」は、正当や公正を表す。倫理学における「正しさ」であるが、これは個人的な道徳感情と混同されやすい。ここにおける「正しさ」は規約によって決められたルールも含まれる。

更に、価値観も人それぞれだと言われやすいようだが、規範的な価値観は実際にはそれほど変わらないものである。多くの個人は社会的な規範を内面化しやすいため、個人の価値観も、全く同じではないが、それほど変わらないのである。「好み」は人それぞれであっても問題ないが、「価値観が人それぞれ」であると、現在、社会は成り立っていない。国が違えば法律も違うと言うが、禁止されていることなどはおおむね同じで、禁止されていなくとも好ましく思われないことは、たいていの国でもそうである。価値も普遍が志向されるものである。

今回、「正しさ」の中でも異なる意味の「正しさ」があることを初めて知った。真理は、道徳等は除いた自然科学における「正しさ」で、**例外なく全ての人がそれは確かだと見てとる**。正当や公正は、道徳的な面における「正しさ」であり、微妙な違いはあれど、根本は同じであるとわかった。

実際、「価値観は人それぞれ」という言葉はよく聞くが、「命は尊重すべきである」とはどこに行っても言われている考えである。おそらく、「好み」と「価値観」を混同する人が多いために、「価値観は人それぞれ」とよく言われるのかもしれない。

また、多くの個人は社会的な規範を内面化するというのを聞き、人間であることは同じでも、国によって人柄が若干異なるのは、そのせいであるのかもしれない。各国の国民は、その国の規範を内面化するから、**国民性というもの**があるのであろう。

コメント [y89]: 現実には間違っ理解する（誤解する）人もたくさんいます。

コメント [y90]: 具体的にどのようなものですか？

授業では前回のコメント返しからの哲学についての紹介、哲学における正しさとは、人によって国によって価値観は違うのか、ということを説明された。

正しさの考え方は人それぞれである。ある人にとっては当たり前のことでも別の人にとってはありえないことはもちろんある。これは国同士や時代においても違いがあるのは考えられることである。しかし、全体としての色は違うものでもその根底にある考え方、基

本の法は古今東西どこにおいてもおおむね同じである。例えば犯罪を犯してはならない、嘘をついてはいけないなど。そのため、多くの人の価値観や道徳感情も根底では変わらない。個人の価値観は社会の考え方を色濃く反映するため、その社会の考え方が大きく違わないとすれば、多くの人にとっての価値観というものは変わらないという論理である。ただ、社会自体が大きく道を外れ、過ち、逸脱していく場合ももちろんある。

授業では上のように、多くの人にとっての考え方は根底のところでは変わらないとのことだったが、納得しつつもやはりそうはいつでも人によって違うと**思ってしまう**。人殺しはいけない、嘘をつかない、目上の人には敬えなど、確かにとても基本のところではどの時代どの地域の人も考え方は同じののだろう。しかし、その上に形作られる人それぞれ特有の考え方というものがありにも千差万別に**自分の目に映る**ため、いまだ事実として実感がわからないのである。また、異文化間での折り合いがつかないとき、テレビなどのメディアを見ていてもある問題、議論についてどうしても二者間の意見に決着がつかないとき、さらに身近な人の間でも考えの齟齬が生じたときなど、多くの場面で「価値観なんて人それぞれだから。」とか、「生まれも育ちも違うのに考えが合うはずがない。」と、どこかで**決着を諦めていた**ところがあるのではないかと考えることが多いことにも気が付いた。こういった考え方は僕だけのものなのだろうかそれとも日本人特有のものなのだろうか、はたまた世界の誰しもがそのように思っているのか、**非常に気になった**。

なぜ、人々は哲学的な観点からみれば、根底のところでの考え方は一緒なのに、価値観は千差万別であると思ってしまうのか。さらにこのような考え方はある種特有なものなのか、今回の授業の内容を聞いて私自身驚いただけに非常に気になった。

私が前回の講義から抱えていた疑問点について言及して頂いて大変喜ばしいことでした。世界中どこでも誰でも基本的な正当さ・公正さが同じであるということでした。しかし社会全体が正しさを過つことがあるという話があり、ここに強い関心が生まれました。その例が日本の特攻隊であるという話がありました。これは現代における紛争問題もおなじです。宗教、歴史、思想の違いによって生まれる微妙な正しさの誤差。これが命を奪い合う紛争を生み出します。

ここで疑問が生じたのですが、この**誤差を埋めるためにここまで血が流れる**必要があるのでしょうか。私は全くとは言わないまでも流す必要はないと言いたい。先ほども言いましたが全世界の人間には普遍的な正しさが備わっています。基本的な考えがおなじで分かり合えないはずがあるのでしょうか、いえありません。

コメント [y91]: 他の文化圏について実際にどれほど目にしましたか？「文化はさまざまに異なる」という、よくある言葉だけが頭にあるのではないですか？

コメント [y92]: 「人それぞれ」は対話や相互理解を諦める言葉なのです。

コメント [y93]: なぜ気になったのか、理由を説明してください。他の人がどう考えているかなんて、別にどうでもよいのではないですか？むしろ、真理がどうなのかを知る方が重要ではないですか？

コメント [y94]: コメント y17 を参照。

私が今回の授業で学んだことは、正しさや価値観は人それぞれであるということだ。万物の根源をタレスは水、アナクシメネスは空気、デモクリトスは原子、ヘラクレイトスは流転するもの、ピタゴラスは数だとしているように、正しさや価値観は人それぞれである。

コメント [y95]: そうではないと授業で説明しました。

哲学の神について。

「プラトン・アリストテレス・キリスト教」が西洋思想の三本柱である。

アリストテレスの神は、不動の動者ですべての事象の第一原因という、科学的な理論となっている。キリスト教の神は創造神で全知全能である。この 2 つをどう融合させるかが 13 世紀の哲学において論点となった。

近代科学は、神の創造の意図に迫りたいという動機で成立した。

19 世紀には大学が設立され様々な専門分野が教えられるようになり、学問も「文科した学問」へと変質した。結果、「科学」として扱われるようになった。

一言に「正しさ」といっても様々である。True とは「真理」を意味し、自然科学における「正しさ」を指す。Right とは正当・公平を意味し、倫理学における「正しさ」を指す。

道徳的な正しさとは社会的な規範であるため、個人の価値観はそれほど違わない。そのため、価値も普遍が志向されるのである。

「人それぞれ」が蔓延している理由として、戦前の「価値観の押し付け」「権力による強制」があげられる。しかしその対抗策としての「人それぞれ」教育は失策であった。

人には個人差があるため「人それぞれ」という言葉があるのは最ももつとも（あえて漢字で書くなら「尤も」）だが、社会的な正しさは皆が一貫して持たなければならない。そうしなければ社会の秩序が乱れ、最悪の場合国そのものが成り立たないからだ。

コメント [y96]: 「事実として持っている」という話はしましたが、「持たなければならない」とは言っていない。

今回の授業では、コメントの書き方と、哲学と神、人生観、科学と、「正しさ」と、価値観について学んだ。

コメントの書き方は、抽象概念は避け、なるべく深く具体的に何を伝えたいか表すようにすることだ。

そして、哲学と神、人生観、科学についてだが、哲学はある程度知識がないと理解できないことがわかった。哲学は頭の中で考えても答えは出ず、調べることが良い。

正しさについてだが、True:真理、Right:正当、公正、二つの意味を見て改めて正しさの多様性に気づいた。それと同時に言葉にはもっと意味がわかる。

価値観について、やってよいこととやってはならない、社会において共有された価値観は、世界各国においておおむね同じということを知った。だが、社会的な規範は全く同じであ

るわけではないため、日本から離れて見つめてみたい。

コメント [y97]: 次回、留学についての説明をしますから、ぜひ留学してください。

個人的な道徳感情や価値観と社会的な規範は異なる。社会的な規範に基づいて人は行動するため、個人の価値観はそれほど多様ではない。法律で禁止されていないだけで、日本で好ましいとされてないことはほかの国々でもたいてい忌避されている。「正しさ」の定義は学問によって異なり、しばしば個人的感情と混同して捉えられる。

「社会全体が過つ場合もある」ことの例には、植民地政策やナチズムなどが挙げられる。しかし、私たちが後の世に生きており、それが間違いであったと知っているからそれを過ちと主張できる側面がある。同時代人の批判もあれば、国民のある程度が消極的な賛成に留まった場合もある。しかし、(後世の人々から見て)その失敗は止まらなかった。現在の私たちの考えも、それが正しかったのかそうでなかったのかは後世の評価を受けるまで分からないのではないか。

コメント [y98]: どうして「後からなら分かる」のでしょうか？

植民地政策もナチズムも、自然消滅したのではなく、「まちがったもの」として打倒されました。つまり、それらが「まちがいだ」と分かったのは、後からでなく、植民地政策やナチズムが流布していた時代においてだということです。

コメント [y99]: そんなことはありません。

哲学は19世紀以降自然科学とは別に分化した。学問も、分化した学問へと変質した。正しさは普遍的で、人それぞれではないある。Trueは真理であり、自然科学における「正しさ」である。Rightは正当、公正であり、倫理学における「正しさ」である。価値観とは人それぞれで個人的な道徳感情や価値観と社会的な規範とは異なる。

意見;学生生活や社会に出ると必ずと言っていいほど価値観が違う人と出会うと**思います**。そこで、自分としては価値観が違う人とはあまり関わりたくないですが、否が応でも関わらなければいけない時は、物事をうまく進めたり協力しなければいけないので仕方なく付き合うようにしているのですが、やはりそういう時には周りに迷惑をかけないように苦手な人でも関わらなければいけないのか。

コメント [y100]: 上司や同僚など、関わらなければいけない相手であれば、関わらなければならぬでしょう。

今回の授業の重要な点は、「正しさ」はさまざまであるということである。英語の“True”は真理という意味で、自然科学における「正しさ」であり、言葉とモノが一致することを指す。しかし、同じく英語の“Right”は正当・公正という意味であり、倫理学における「正しさ」を指す。つまり、社会的規範のことである。社会的な規範は多くの場合、個人の価値観として内面化されるため、個人の価値観が人それぞれになることはないし、もしそうでなければ社会は成り立たないのだ。私はこの授業を通して、社会的な規範である「正しさ」が普遍的で、戦争での人殺しは容認するような「個人的な道徳感情」が人それぞれな

のであることがわかった。個人的な感情のみで物事を考えないように、多面的な視点を忘れずに日々を過ごしていきたい。

「正しさ」は普遍である。なぜなら、普遍的な正しさを探求することこそが哲学であるからだ。授業によると、「正しさ」には自然科学における「正しさ」と、倫理学における「正しさ」がある。

例えば前者について、私はクリスチャンではないのだが、キリスト教における隣人愛は「正しさ」である(とイエスは言っている)。イエスはキリスト教カトリックでは神とされるが、正しさを探求し、広めたという点から、哲学者と同じなのである。その隣人愛を実行するかどうかは人それぞれであるが、キリスト教では、隣人愛が「正しさ」であることに変わりはない。つまり、「正しさ」は普遍である。

「正しさ」は普遍であるのは、普遍的な「正しさ」を探求することこそが哲学だからである。たしかに、万物の根源を水とみなすタレスや、万物流転と考えたヘラクレイトスなど、主張はバラバラである。だが、これらの主張は、彼ら哲学者たちが普遍的な「正しさ」(ここでは万物の根源)とは何かを探求した結果、それぞれで導き出された解答なのであって、それがこの世の中の本当の「正しさ」かどうかは分からないのだ。少なくとも彼らはそれぞれを普遍的な「正しさ」と信じ、主張した。これは現代でも、自分で真理を考え、そして論文に書くのと同じである。したがって、哲学は普遍的な「正しさ」を探求するものであり、普遍的な「正しさ」は存在する。ゆえに、「正しさ」は普遍である。

今回の授業は正しさや価値観についての授業だった。正しさに関しては自然科学における正しさである言葉と物の一致を表す True(真理) や倫理学における正しさである Right(正当、公正)のよう一言で正しさと言っても様々であるということ、また価値観は個人的な道徳感情とは異なるものであり、好きということと価値観も同じではないということ、価値自体も普遍が志向されるということだった。価値は普遍を志向するという点について、「水」を例にとると、日本では水は蛇口をひねれば簡単に手に入り、生活の中で惜しげもなく使われている。しかし水が不足しているような開発途上国では、「女性が安全な水を求めて 10 キロメートル以上も歩くことも珍しくありません。」(なんとかしなきや!プロジェクト、【開発途上国の水事情】水不足に悩む人々の生活とは?、nantokashinakya.jp、4月22日閲覧)というような現実がある。このように生活の様式や環境が違うなかで、水の価値というものの普遍は目指せるのだろうか。この例に限らずある事柄の価値はそれに価値を見出す個人が自らの生活や周りの環境を考慮して決めていくものであると考えられるから、

コメント [y101]: 以下、理由になっていません。

コメント [y102]: 宗教者は哲学者とは異なります。哲学は論理や事実を尊重しますが、宗教は必ずしもそうではありません。

コメント [y103]: 個人が「信じる」ことと「正しい」ことは別です。「万物の根源は水だとタレスが信じた」からといって、実際に「万物の根源は水だ」ということにはなりません。

コメント [y104]: 日本人にとってであれ、発展途上国においてであれ、水は人間が生きていくうえで欠くことができません。その意味で水には重要な価値があります。違いは供給が豊富か否か(値段が高いか安い)という点だけです。

普遍的なものとするのはなかなか難しい事だろう。

この講義を通して、正しさとは人それぞれに異なるものではなくであり、単に「正しさ」と言っても、自然科学における正しさという意味の「真理」と、倫理学における正しさという意味の「正当・公正」に分けられることが分かった。また、改めて考えてみると当たり前のことだが個人的な道徳感情や価値観と社会的な規範は異なることも学んだ。そのため、様々な法律が誕生し、多種多様な人々を統制していく必要がある。過度な自由性は、マイナスを生み出すことがあるためだ。

コメント [y105]: 具体的にどのようなマイナスか書いてください。

今回の授業では、まず平等や幸福と簡単に言い表しても何をもって平等であると言えるのか、また幸福であると言えるのかという問題があることを学んだ。そこで平等を正義と考えたり、平等の定義を個人の能力から判断したり、幸福については功利主義的考え方からアプローチしてみたりするなど、さまざまな尺度から考えることができることを知った。また授業の後半で興味深かったのは、自国で好まれない行動は他国でも相対的に好まれないということだ。というのも、文化が違っても、また禁止されていてもいなくても、人々の行動が暗黙のうちに慎まれるからだ。

コメント [y106]: 具体的に平等についてどのような考え方があるか、書いてください。

今回の授業では、なぜという問いにはさまざまな答えがあり、アリストテレスの四原因説に基づく、目的、動力、材料、形相に分けることができると分かった。例えば、家はなぜたっているのかという問いに対して、目的によると住むため、動力によると大工さんがつくったため、材料によると木の柱があるため、形相によると屋根や扉があるためとなる。なぜという問いには、多くの視点からさまざまな答えを導き出すことができると理解した。

① 今回の授業を通して学んだことは、正しさとは何か、ということである。一般論として挙げられる正しさとは、人それぞれで良くて、正解なんて求められない。といったものだ。だがこれは間違いであり、実際のところ正しさとは、言葉と物の言文一致の正しさ(True)と、集団(構成員や人数は問題でない)に於けるある程度の共通項公正さとしての正しさ(Right)の

二種類の定義できるものがあるということだ。また、価値観も人それぞれで良いというもの(好み道徳的価値観)とは別に社会的な規範となる定義できる価値観(社会的価値観)があるということも学んだ。

② 先生の主張に反して Right は普遍的な正しさではないと主張する。

③ 私が、②のように主張するに至ったわけを今から説明する。先生は、「Right とは倫理学における『正しさ』と説明なさった。倫理学とは「社会的存在としての人間の間での共存の規範・原理を追求する学問」である。①-ここで注目したいのが、「社会的存在としての人間の間での」という部分だ。社会とは「人間の利害・目的などに基づいて作られるもの」だ。②-つまり「社会的存在としての人間」とは、人間の利害・目的を追求する人間という風にとれる。そしてその「間」で作られる倫理とは、人間の集団の利害・目的に基づいて形成される共存の規範・原理である。

言わずもがな、人間の利害・目的は、必ずしも一貫したものではない。例えば、当初は中国大陸の覇権獲得を目的に対立していた中国国民党と中国共産党は、日本が中国大陸を征服しようとする、先の目的を一旦曲げ、両者は民族存続のため協力して日本に対抗した。というのがいい例だ。

話を纏めると、Right とは、人間の利害・目的に基づいたものであるから、それが普遍的な正しさということとはあり得ない。

以上で私の主張を終わります。

広辞苑 第六版 岩波書店 2008,2014 「倫理学」参照

広辞苑 第六版 岩波書店 2008,2014 「社会」参照

ひとつの言葉、例えば平等、にも解釈の仕方が複数ある。平等に同じ賃金を与えるのか、もしくは成果あたりの報酬を平等にするのかといったふうに。「なぜ」という問いにも解釈は複数あり、「なぜ」と質問する際にはどうしてその質問をするのかがわかるように、どの側面について答えたらよいかかわかるように質問しなければならない。

もともと哲学とは今でいう自然科学のことを指していた。それが専門分野を別にして教育機関で教えられるようになり科学(分科した学問)と呼ばれるようになった。現在辞書では「人生・世界、事物の根源のあり方・原理を、理性によって求めようとする学問。また、経験から作り上げた人生観」(授業スライド7ページ)とされている。

「正しさ」についても複数の解釈ができ、自然科学における「正しさ」はある言葉と物が一致することが必ずある物を指すことである。倫理学においては、世間一般の共通理解としての「正しさ」がある。道徳的な「正しさ」は人それぞれではない。社会において共有された価値観のことを指すも、多くの場合は人それぞれではない。例えばドラッグについては国によって禁止されていたりそうでなかったりするものもあるが、積極的に使うべきだと

コメント [y107]: 違います。ここで言う「社会的存在」とは、単に「集団で生活する」という程度の意味でしょう。

コメント [y108]: 人間の利害や目的は、たいてい同じでしょう。「死にたくない」「苦しみにたくない」「おいしいものが食べたい」「仲間がほしい」「仲間認められたい」などなど、人間の本性からして、だいたい同じではないですか。近代の哲学では、人間の本性は普遍的であるということを前提として、倫理学や社会思想(民主主義の思想)を構築しました。

考える人は(おそらくだが)いない。社会が成り立っている以上、人の価値観は誰もそれほど違わないのである。

社会的な「正しさ」とは多数決のように決まるのだろうか。自然科学的な「正しさ」は誰がどう思おうと必ず決まっているが、時として間違いをそうだと気付かずに正しいものとして認めてしまうことがある。データには矛盾が見当たらず、ほとんどの者がそれを正しいと言えばその時代のその社会ではそれが「正しい」ということになった。たとえ、ごく少数の者が異を唱え、そちらが正しかったとしても。現在「正しい」とされているものの中にも実は間違っているものは存在するのかもしれない。

今回の授業は理由をつけたり抽象的にではなく具体的に書くことで論理的文章になるということが特に重要であったように思う。また、真実と公正の話が出た。これは哲学が日常生活で役に立つことにつながるという点で興味を持った。

先生は正しい知識が哲学であり正しい行為が倫理であると言っていた。真理と公正を司る機関として裁判所が思い浮かんだ。例えば、ある事件が起きて検察官や弁護士が正しい知識証拠を集めてくる。そして正しい知識証拠をもとに被疑者に公正な判決を下すのが裁判官である。もしこの機能が完全に果たされれば冤罪は起こらない。しかし現実には起こっている。真実がわからないから公正な判断ができないのか、真実がわかっているのに公正な判断が下せないのか、私はどちらもあると思う。弁護士も検察官も裁判官も哲学と倫理を持っていないといけない。

また、仕事に限らず普段の生活でも哲学と倫理は必要になる。例えば、道端にポリ袋を捨てるかいなかを決める時、動物が誤って食べてしまうかもしれないし地球の有限な資源を大切にすることが人間の未来にとってプラスになるからポリ袋は捨てはやめようと思いとどまる。さらに投票の場合でもそうだ。どの党がどのような政策を打ち立て実際に行動しているのかどうか正しい情報を集めて正しい投票をしなければならない。(正しい投票なんてわからないだろうと思うかもしれないが、少なくとも表現の自由が認められないなど人権をないがしろにするようなリーダーを選ぶのは正しいとはいえないだろう)

人は様々な選択に直面する。その時に役に立つのが哲学である。

今回の哲学の講義では主に、哲学における「神」と「正しさ」の概念について学んだ。

まず哲学の神についてだが、西洋思想の三本柱であるプラトン・アリストテレス・キリスト教にも「神」というものは存在していて、哲学においてもそうである。ただ、アリストテレスとキリスト教の神観は違って、前者では神とは全ての運動の第一原因であるとい

コメント [y109]: いるかもしれないが、それは間違った価値観でしょう。

コメント [y110]: 人類普遍的な価値(人間の生存のために必要なこと)を実現するものが、「社会的な正しさ」になるでしょう。多数の人が誤ることがあるので、多数決で「正しさ」を決めることはできません。

コメント [y111]: 哲学を役に立たせるためには、自らきちんと学んで哲学を身につけていなくてはなりません。

う考えで、後者では神は全知全能の創造主あるというものだ。両者の明らかな神観の違いは、アリストテレスの考え方で神は、「全ての運動には目的がある」とするその運動の最初の原因を合理的に説明するために考えられた存在で、決してキリスト教でいうところの創造主ではないところである。

次に、「正しさ」について。一概に正しいと言ってもその「正しい」にも、真理・Trueと正当・公正・Rightがある。Rightは倫理学における「正しさ」であるが、それは道德感情とは別ものだ。

価値観は人それぞれか?というところに関して質問がある。基本的に「道德的な正しさは、社会的な規範」であるとされているが、それは「犯罪(特に殺人など)が日常に蔓延している集団や社会」においても適応されるのだろうか。

私はそのような社会においては「道德的な正しさは、社会的な規範」という考えは当てはまらないと考えて、それはなぜかという、もしその考えを適応させるなら「正しさ」を「他者を害してもいい」というものにしなくてはならなくなるからだ。もしくはその社会では、社会規範としては他者を害してはならないとなっているが、社会全体が実際には他者を害する方向性に向かっているから、ということにしないと上の考えは当てはまらない。

そもそもどうしてこの質問をしようと思ったかという、と、「道德的な正しさは、社会的な規範」という考え方が当てはまらない場合、その理由は、この考え方がその社会に合っていないのか、それとも元々その社会(集団)全体が過っているのか、はたまたこの考えが社会(母集団)に依存しているからなのか疑問だったからだ。

「正しさ」といってもさまざまで、true:真理の「正しさ」は、自然科学における正しさであり、言葉と物の一致のことで、right:正当・公正の「正しさ」は、倫理学における「正しさ」であり、個人的な「道德感情」と混同されやすく、信号の赤のように、道德的には赤でも青でもよいが、規約によって決められたルールもある。また、個人的な道德感情や価値観と社会的な規範とは異なり、道德的な正しさは、社会的な規範であり(社会において共有された価値観)、多くの個人は社会的な規範を内面化するので、個人の価値観もそれほど変わらない。

正しさといってもそれぞれであるが、犬にそっくりな猫がいたとしても、その猫は犬であるということは正しくない。犬は犬であり、猫は猫である。しかし、犬にはたくさんの犬種があるが、それはどうしてすべて犬と定義されうるのだろうか。それはすべての犬種が犬であるという必要十分条件を成しているからだ。猫の場合も同様である。だから、私たちが見た目でその動物を犬や猫だと判断してもそれは正しいかどうかはわからないのだ。視界に映るもの、映らないものすべてに理がある。理を考えたらうえて、しっかり物の本

コメント [y112]: そうした社会に暮らす人たちが、「自分たちの社会はとても良い社会だ。自分たちの社会の在り方こそが、正しい社会の在り方だ」と思っていると思いませんか? 「自分たちの社会はおかしい、間違っている」と思っているのではないですか? 事実として犯罪が多発するからといって、犯罪が正しいということにはなりません。

コメント [y113]: なぜそうなるのですか?

コメント [y114]: 犬の必要十分条件とは何ですか?

コメント [y115]: 理とは何ですか?

質を見抜かねば、周りにとっての当たり前も、当たり前ではなくなる可能性がある。

今回の授業で哲学において価値観とは普遍性をもち人の考えで変わるものではないと知った。

そこで疑問に思ったのが法律の大元の考えは普遍的であり、議論されるものではあつてはならないはずではないのだろうか?確かに時代によって科学の発展や時代が変わって新しい問題が起こることはあるが、憲法など法の規範となるもの~~のを~~改正~~を~~を議論するの~~はを~~を疑問だ。

コメント [y116]: 自分たちが「普遍だと信じているもの」が、「本当に普遍」なのかを確認するために、議論は必要です。